



2012年度
複十字シール図案
デザイン:安野光雅画伯

健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会普及広報課内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

第63回結核予防全国大会開催

平成24年2月14日、リーガロイヤルホテル(大阪市)において秋篠宮妃殿下のご臨席を仰ぎ、第63回結核予防全国大会が開催されました。また、同大会で秩父宮妃記念結核予防功労賞表彰式が行われ、本協議会からも事業功労賞(団体)に社団法人大阪エイフボランタリーネットワークが受賞し、妃殿下より表彰状が授与されました。



大会式典にておことばを述べられる秋篠宮妃殿下

「第六十三回結核予防全国大会」おことば

平成二十四年二月十四日(大阪府)

「第六十三回結核予防全国大会」がここ大阪府において開催され、皆さまにお会いできたことを、大変うれしく思います。

本日の大会におきまして、永年にわたって大きな貢献をされ、「第十五回秩父宮妃記念結核予防功労賞」の表彰を受けられる皆さまに、心よりお祝いを申し上げます。これまでの受賞者をはじめ、結核の予防や対策に取り組んでこられました多くの方々のご努力に対し、深く敬意を表します。皆さまが、今後ますます活躍されますようお願いいたします。

わが国の結核事情を見ますと、結核罹患率は着実に低下し、低まん延国への歩みを強めておりますが、未だに年間約二万三千人が新たに結核を発症しております。そして、その半数以上が七十歳以上の高齢者であること、若い年齢層における外国人の割合が増加していることや、大都市における結核罹患率が高くなっていることなど、複雑で多様な課題を抱える中、これからの結核対策を更に着実に進めていく必要があります。そのためには、医療従事者も含め多くの人々へ、結核についての正しい知識を広め、理解を深めていくことも重要でございます。

本式典後には、大阪における結核の状況などをふまえ、健康に関して、また、結核対策の方向性についての講演がおこなわれると伺っております。この機会に、結核についての理解がより一層深められることを期待しております。

東日本大震災の発生から、来月で一年を迎えます。被災地では、今後も様々な支援が必要とされる状況にあり、結核予防会も他の医療機関等と協力して被災地域における健康支援活動に取り組んでおります。現在は、被災県の保健所と連携して結核発生状況の調査を実施するとともに、福島県については、県立医科大学と協力して県の内外への避難者の健康管理調査などもおこなっております。このように意義深い活動が続けられていますことを、大変心強く思っております。

本日、参加されている皆さまが、大会で得られました成果をそれぞれの地域における活動に十分活かされ、広く人々の健康な生活をしっかりと支えるために、より一層力を尽くされることを願い、式典に寄せる言葉と致します。

第15回秩父宮妃記念結核 予防事業功労賞(団体部門) 受賞

社団法人大阪エイフボランティアネットワーク
会長 上ノ山 幸子



平成24年2月14日秋篠宮妃殿下ご臨席の下、第63回結核予防全国大会が大阪市で開催され、全国から多数のご参加を得て、盛大に開催されました。この大会は従前2日間の日程で行われておりましたが、今回は1日での開催となりました。

私は、大会開催地の婦人団体として、数々の大役を仰せつかり、至らぬ点が多々あったことと存じますが、皆様方のご協力により、無事大任を果たささせていただきました。

さて、この大会で私たち「大阪エイフボランティアネットワーク」は、第15回秩父宮妃記念結核予防事業功労賞(団体)の榮譽を賜り、心から感謝申し上げます。

秩父宮妃殿下には、昭和36年4月に私たちの「第7回大阪衛婦大会」にご臨席いただいて以来、昭和58年の「第30回衛婦大会」までの間、節目の大会には必ずご臨席をいただき、その都度、温かい励ましのお言葉を賜った懐かしい思い出がございますので、このたびの受賞には、殊のほか感慨深いものがございました。

また、今年の3月の「第58回大阪エイフボランティアネットワーク大会」では、多くのご来賓の皆様から受賞を祝していただき、大変嬉しい思いをいたしました。

このたびの受賞理由は、長年に亘る結核予防活動に対する功績でございますが、今日まで活動を継続実施できたのも、結核予防会大阪府支部様や賛助会員の皆様方の物心両

面からのご支援があったからこそでございます。

ここに改めて関係者の皆様方に、心からお礼を申し上げます。

この受賞を機に、大阪エイフボランティアネットワーク会員が一丸となって、全国で最も結核事情が悪い大阪から「結核のない街おおさか」を目標に、より一層予防啓発活動に励んで参りたいと、決意を新たにいたしました。

末尾になりましたが、全国結核予防婦人団体連絡協議会の皆様のご活躍と、ご発展を心からお祈り申し上げます。

第63回結核予防全国大会 を終えて

社団法人大阪エイフボランティアネットワーク
副会長 金谷 美津子



昨年、東日本大震災により被災された方々に謹んでお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復興を心からお祈りいたします。

さて、第63回結核予防全国大会は、結核予防会総裁秋篠宮妃殿下ご臨席の下、2月14日大阪市内で開催されました。

大会式典は、大阪府支部長の開会のことばに始まり、知事・市長の挨拶と続き、秋篠宮妃殿下から大阪

開催の意義と更なる運動推進を含むおことばを賜りました。

この式典の中で、大阪エイフボランティアネットワークは、結核予防事業功労賞(団体)を受賞いたしました。会にとって望外の喜びでございます。

式典後のアトラクションは、大阪府最北端の能勢町で約200年前から伝承されてきた「素浄瑠璃」に、人形・囃子を加えた「能勢三番叟」が上演されました。このような浄瑠璃が、大阪の山村で伝承されていることに、驚かれた方も多かったことと思います。

次のシンポジウムでは、1人目はテレビ等で活躍されている大平サブロー様から、ご自分の健康管理についてのお話を中心にご講演いただき、2人目は元WHO結核対策部長として「DOTS」戦略を提唱し、世界の結核状況の改善に多大の貢献をされました古知新医学博士から、結核対策についてご講演いただきました。

皆様方ご承知のとおり、当地大阪の結核事情は極めて厳しく、全国ワースト1が長年続いています。大阪には「あいりん地区」がある等、



アトラクション



大平サブロー氏



古知新氏

特殊な事情もありますが、依然として高齢者層の新規患者が多く発見され、また若者の間でも集団感染が起っています。

このため、大阪府では今年度から3年間、重点的に結核対策を実施し

ています。大阪エイフにおきましても、全国大会での受賞を機に、結核予防運動・複十字シール運動のみならず、COPD・生活習慣病予防運動等、これまで以上に取り組みを強化して参ります。

結びに、本大会が成功裡に終わられましたのも、全国からご参加いただきました皆さま方のお陰であり、心から厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第63回結核予防全国大会 決議

平成22年には、23,261人の新規結核患者が発生しており、人口10万対罹患率は18.2で、我が国は依然として結核中まん延国です。こうした中で関係者の真摯な努力によって結核低まん延国化に向けた着実な歩みが進められていますが、高齢者や社会経済的弱者・高まん延国からの新入国者などのハイリスク集団への偏在や多剤耐性結核などの課題があります。

特に、ホームレスや、日雇い労働者などの結核のハイリスク層、発症すると二次感染を生じやすい職業に就いているデインジャー層などが多い大都市の結核問題は解決しておらず、医療機関とも連携し地域に密着した対策の強化が求められています。

世界に目を向けると、世界保健機関（WHO）の報告によると2010年の新規結核患者は推定880万人、死亡者数は140万人で、世界的に結核は依然として大きな社会問題で、特に開発途上国では、他の健康問題と並んで深刻な事態にあります。しかし、結核菌の迅速診断法や新しい抗結核薬が開発され、また患者の早期発見のための胸部X線検査が再評価されつつあり、我が国からの技術協力による貢献がさらに必要とされています。

昨年4月には、「結核に関する特定感染症予防指針」が改訂され、平成27年までに人口10万対罹患率を15以下とするなどの具体的目標

も掲げられ、今後5年間の結核対策の方向性が示されました。この予防指針に基づいて、各都道府県においても結核予防計画の見直しが行われ、結核制圧へのさらなる一歩が踏み出されたところです。

平成22年度診療報酬改定で一定の改善が図られましたが、結核医療や看護が多様化、複雑化しており、総合的で高度な医療体制が必要であるにもかかわらず、他の疾病に比べ診療報酬評価が低く診療内容と診療報酬とのバランスを崩して不採算部門に陥っている状況をふまえて、より適正な評価が行われる必要があります。

さらに、患者数の減少と在院期間の短縮化による必要病床数の減少、高齢化に伴う合併症を持った結核患者の増加等に対しては、地域特性をふまえた患者中心の医療の確立を目指して、必要病床数の確保、病棟単位から病床単位への転換、地域医療の連携体制の強化、医療の質の確保等を推し進める必要があります。

一方、感染診断法、遺伝子技術を応用した種々の結核菌の検査、治療薬の開発など様々な技術革新も進められており、その応用による成果が期待されます。

結核の発病や悪化に喫煙や糖尿病、悪性腫瘍などが関与しており、生活習慣病の予防が結核予防につながる事が再認識されています。

そこで、国や民間団体の活動によ

り、強力な禁煙運動や受動喫煙防止対策を推進し、COPD（慢性閉塞性肺疾患）や肺がんなどの呼吸器疾患対策に努める必要があります。

そして、生活習慣病対策としては、特定健診・特定保健指導が重要な役割を担っており、地域において積極的な取り組みが展開され、円滑な実施にむけて見直しが行われているところです。

我々は、国内の結核対策や国際協力を強力に進めていくとともに、呼吸器疾患対策や生活習慣病対策等の事業をも推し進めるほか、東日本大震災被災地への健康支援を継続して実施します。

よって、今大会において検討の結果、次の通り決議します。

1. 我々は、平成27年における結核罹患率を15に低下させるため、次の対策に取り組みます。
 - ① 国、地方公共団体、結核予防会及び結核予防会各都道府県支部等においては、結核に関する知識を国民に正しく伝え、結核の予防とまん延防止に努めるとともに、結核の治療に関する知識や技術を医療関係者に普及すること。
 - ② 国、地方公共団体及び結核予防会は、結核研究をより一層推進し、新診断技術や新抗結核薬の開発とその早期導入を進めるとともに、結核対策のための人材育成を図ること。

- ③ 国及び地方公共団体は、大都市における生活不安定者等の結核問題の解決のために、広報、啓発活動の強化、最適な医療提供環境の整備を行うこと。さらに、生活支援、服薬支援などを一元的に行い、社会経済的弱者の健康問題に総合的に取り組むこと。
2. 我々は、適切な結核医療の提供のために、必要な結核病床の確保、医療機関の連携体制の強化および結核の診療報酬体系の是正を要望します。
- ① 結核の専門病院は必要な病床数を維持するとともに、結核高度専門病院は他の医療機関への技術指導を行い、地域医療ネットワークの強化の支援を行うこと。
- ② 国及び地方公共団体は、合併症を有する結核患者の最適な治療を提供できるよう、地域医療連携体制の強化に取り組むこと。
- ③ 国及び地方公共団体は、結核の診療報酬評価の是正に継続して取り組むこと。
3. 我々は、結核の国際協力として以下のことに努めます。
- ① 国は、「ストップ結核ジャパンアクションプラン」に基づいて、必要な財源を確保して施策を推進するとともに、結核対策を含む保健分野に知見を有する関係団体の主体的活動を支援すること。
- ② 国は、見直しを進めている「ストップ結核ジャパンアクションプラン」により「官民が連携して、世界の年間結核死者数の1割を救済すること」を念頭に置き、世界、特にアジア及びアフリカにおける結核対策を支援すること。
- ③ 我々は、結核予防の普及啓発や国際協力の貴重な財源となる複十字シール運動を盛り上げるため、関係者・団体への働きかけに努めること。
4. 我々は、肺がんやCOPD等の呼吸器疾患対策として以下のことに努めます。
- ① 「呼吸の日」(5月9日)・「肺の日」(8月1日)行事をはじめ、国民に対する普及啓発に努めること。
- ② 生活習慣病対策の柱の一つとしてCOPD予防を位置付け、調査・研究を支援するとともに肺機能検査等を健診の必須項目に加え、その予防と早期治療に努めること。
5. 我々は、特定健診・特定保健指導対策として以下のことに努めます。
- ① 特定健診・特定保健指導については、生活習慣病予防における指針のもと円滑な実施に努めること。
- ② 特定健診・特定保健指導の推進を国民運動にしていくため、関係者と連携し、スマートライフプロジェクトなどの普及啓発活動を支援すること。

以上5項目の実現に向けて一層努力するものとします。

以上決議します。

平成24年2月14日
第63回結核予防全国大会

第63回結核予防全国大会 宣言

日本の平成22年における結核罹患率は10万対18.2で、低まん延国化に向けて歩みを進めています。しかしながら、我が国の結核を取り巻く状況は、合併症を伴う高齢患者の増加、大都市への集中化、外国人の患者割合の増加など、複雑化し質的な変化を呈しています。

国内においては、科学的で実効性のある結核対策の充実に努めるとともに、地域特性をふまえた患者中心の結核医療提供体制の確立及び結核医療に対する診療報酬の適正化に引き続き取り組み、東日本大震災

被災地への健康支援実施を継続します。

世界に向けては、ストップ結核ジャパンアクションプランを確実に実施し、結核の制圧へ向け総力を挙げて取り組みます。

さらに、特定健診・特定保健指導の推進、禁煙運動や受動喫煙防止対策の推進による肺がん、慢性閉塞性肺疾患(COPD)をはじめとする呼吸器疾患及び生活習慣病対策をすすめ、国民に対する正しい知識の普及啓発に努め、世界の人々が健康で明るい生涯を送れるよう組織

一丸となって努力します。

以上宣言します。

平成24年2月14日
第63回結核予防全国大会





公益社団法人として新たなスタート

公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会
会長 中畔 都舎子



この度、平成24年3月1日付けで新しく公益社団法人として認定を得て、心新たに第一歩を踏み出すことになりました。その間、関係各位には一方ならぬご指導ご支援をいただき深く感謝し厚くお礼申し上げます。

顧みますと、私達結核予防婦人会は、昭和52年発足以来、結核をなくそう“地域から全国へ更に世界へ”を合言葉に、会員皆様方とのネットワークを軸に地道な実践活動を展開して参りました。その方向性は40年を経た今日でも不動です。しかし、現在我が国の結核をとりまく状況を見ますと、今も1日に約60名の患者が罹患中には命を落としている人もあります。とりわけアジアでは、重要な感染症で地域全体では毎日5000人近くが結核で亡くなっておられるとのこと。こうした中、私達が活動の一環として行っている複十字シール運動の益金が結核の根絶に向けて大きく貢献していることが海外で高く評価されていることを共有し、減少傾向にある複十字シール運動の普及啓発を更に拡大するため、ご協力お願いいたします。

今、日本は政治的にも社会的にも革命の時を迎えています。なかでも人口減少と少子高齢化は世界のどの国も経験したことのないスピードと規模で進んでいます。持続可能な社会保障と税制など改革は遅々として進まず、多くの人が老後の不安

をぬぐいきれずにおられます。こうした時代だからこそ行政まかせではなく、私達は自らの健康への意識をより高め生活習慣病の改善をはかる等、予防医学の必要性を心がけることが大切かと思えます。

健康は自分自身のものであると同時に社会全体の共有財産であり、健康長寿を実現するため「自分の健康は自分で管理する国民運動」を更に強固なものにしなければなりません。新たな公益社団法人のスタートにあたり、結核予防婦人会員であることに誇りを持ち、確実な一歩を踏み出すことができますよう、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

公益社団法人発足に向けて

公益財団法人結核予防会
理事長 長田 功



全国結核予防婦人団体連絡協議会（以下略して結核予防婦人会）は平成24年3月1日付をもって、公益社団法人として再出発しました。公益法人の認可にあたっては、そのための準備をされた人々のご苦労は大変なものであったと思いますが、この度の認可は、結核予防婦人会のすべての皆様の日頃の結核対策事業に対する熱意と貢献がもたらされているのは申すまでもありません。

新しい公益社団法人の発足を心からお祝い申し上げますとともに、今後の益々の発展を期待いたします。

結核予防会は、一足先に平成22年7月に公益財団法人として認可され発足していますが、今後は結核予防会と結核予防婦人会は共に公益法人として、足並みを揃えて社会に貢献する基盤が整備されたわけがあります。

さて、「公益法人」の「公益」とはいかなる意味を持っているのでしょうか。本来「公」（おおよけ）つまり国や自治体が果たすべき事柄を「民間」がその役割の全部あるいは一部を責任もって遂行することであると考えます。そのために、税制など若干の優遇措置がとられてはいますが「公益法人」ゆえの責務も自覚しなければなりません。そうした意味で結核予防会や結核予防婦人会が今まで果たした仕事を考慮すれば、公益法人として認可されたのは極めて自然なことであると思います。大切なことは更に将来に向かって「公益性」を志向して維持する存在であることであります。

結核予防婦人会の目標は「結核のない世界」の実現であり、そのためには、①国民の結核及び生活習慣病予防②健康増進のための教育活動③複十字シール運動など公衆衛生面での向上をめざすことなどを掲げていますが、これは結核予防会の活動方針と基本的に方向性が合致しており、大変心強く有難く思っています。新しく発足した公益社団法人の順調な発展を祈るとともに、皆さんと共に「結核のない世界」の実現のため頑張りたいと思っています。

公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会
副会長 米窪 千加代



結核予防婦人会の活動は、終戦後の苦しい時代の中で、平和と共に健康第一として進められてきました。

た。貧しくても「食」や「生活改善」の問題があり、「健康」の問題では、特に結核の課題がありました。

昭和25年に長野県内の小学校で集団感染が発生したのがきっかけとなり、予防婦人会の組織ができました。その後、昭和32年には、結核予防婦人会長長野県連合会が発足し、活発な活動が進められました。

国民病と恐れられた結核が蔓延している中で、「結核予防は婦人の手で」をスローガンに、全国的にも撲滅のための組織が立ち上がり、社団法人結核予防婦人団体連絡協議会が昭和52年5月17日に厚生大臣から認可を受けました。

結核予防婦人会が産声を上げてから全国的に患者の減少は順調に進んでおりましたが、先進国の中では今もって中蔓延国と言われる状況を脱していません。「結核0の日」を目指す予防婦人会の役割は終わりません。

さて、国から公益法人制度改革の通達があり、平成25年度には新しい法人としてスタートするようになるとのことでした。一般社団法人にするか、公益社団法人にするかの選択をどうするか、全国結核予防婦人団体連絡協議会も、決定する前の調査検討は大変でした。東京都千代田区の結核予防会に集まっては勉強し、話し合いました。また、事務局は、所轄の行政機関や結核予防会の指導を受け、研究しました。

一般社団と公益社団のどちらにす

るか、「公益」は文字通り国家又は社会公共の利益になる事業をするという任務を遂行する責任と義務があるのです。

私たちは、公益財団法人結核予防会と連携し、広く国民の健康の増進を進める活動の円滑化と成果のために、公益社団法人とすることに決定いたしました。

公益社団法人として新たにスタートするにあたり、今まで以上に、結核は無論、生活習慣病の予防啓発や、海外の国々との交流支援を進めるため、複十字シール募金活動も大切と考えます。今後とも、「公益」の団体として、「健康の輪」を大切に、頑張ってお参りしましょう。

公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会
副会長 木下 幸子



東日本大震災から早くも1年余りが過ぎました。被災地では、がれき処理をはじめ震災からの復旧復興

が依然として進んでおらず、数多くの方が避難生活を余儀なくされています。一日も早い復興を願ってやみません。

さて、現在、世界中で年間約140万人以上もの人が、結核により死亡しています。一方、国内においては、平成22年に約2万人以上の新たな患者が発生し、特に70歳以上の高齢者がこのうちの約半数を占めているそうです。このように結核は決して過去の病気ではありません。

全国結核予防婦人団体連絡協議会は、「結核予防は婦人の手で」をスローガンに戦後まもなく全国各地で誕生した結核予防「婦人会関係団体の組織化を」との気運のもと、

昭和50年10月に結成され、昭和52年には社団法人として認可されました。この度、その公益性が認められ公益社団法人として新たなスタートを切りましたことは全国の会員にとりまして誠に喜ばしいことであり、心よりお祝い申し上げます。

本会は、婦人の組織力と会員相互の協力により結核及び生活習慣病の予防を中心に全国の婦人団体で組織された公益法人であり、会員数約100万を擁する団体です。結核予防関係婦人団体中央講習会をはじめ、各地域の結核予防会と連携して結核予防の啓発活動、複十字シール運動等の活動を行っています。

時代の変化とともに就労女性の増加や地域共同体意識の低下、価値観やニーズの多様化等により構成員の高齢化や減少化をはじめとする課題もありますが、公益法人化を契機にして、全国の会員が力を合わせてさらなる相互連携を行い、本会の諸活動を通して組織の活性化が図られ、今後益々、本会が発展しますことを祈念申し上げます。

公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会
理事・事務局長 山下 武子



〈認定までの経過〉

平成23年1月20日新公益法人認定申請のための協議機関として、会長・副会長2名・

事務局長及び事務局で準備委員会を立ち上げました。作業分担及びタイムスケジュールを作成し、平成23年3月の総会にて「定款の変更の承認」を得、公益法人協会に相談したり、関係書物を購入して準備委員会を開催して準備を進めました。そして、平成23年8月24日に公益認

定申請書を内閣府に提出する事が出来ました。その後数回内閣府からの指導を受けて平成24年2月23日認定され3月1日付けで社団法人解散、公益社団法人登記を済ませることができました。

〈公益目的事業について〉

国民の結核及び生活習慣病の予防と健康増進のための教育、複十字シール募金運動等の公衆衛生向上の為に普及啓発活動を目的とする事業です。

〈事業の主旨は〉

国民の健康増進と公衆衛生の向上の為に普及啓発事業は、行政や関係機関のみでは解決できない国民病として恐れられた「結核」の蔓延下で、「結核予防は婦人の手で」をスローガンに昭和25年に誕生した結核予防婦人会の自主的な活動に

原点があります。以後、この結核予防婦人会の活動はたちまち全国に波及し、全国組織として結核予防婦人団体連絡協議会に結実し、通算60年にわたり継続して参りました。

医療政策としての結核をはじめ、今日的な「国民病」とも言うべき慢性閉塞性肺疾患（COPD）等の呼吸器疾患や生活習慣病予防等のための普及啓発については、医療機関専門家はもとより国民の各層にあまねく浸透させる必要があります。当協議会は公益財団法人結核予防会と連携して、結核予防週間や世界結核デー等における行事等を通じた広報や教育に努め、各都道府県及び市町村の結核対策支援等についても従来通り事業として行って参ります。

具体的には、毎年持ち回りで各都

道府県と結核予防会共催のもとに開催される結核予防全国大会を後援し、各都道府県結核予防婦人会が開催する講習会及び地区別講習会を通じて、地区組織の育成支援を行い、これら事業と結核のない世界を目指した国際協力事業を円滑に推進するための「複十字シール募金運動」に積極的に協力し、結核対策の国際協力視察ツアー、婦人の国際交流等についても結核予防の普及啓発事業の一環として引き続き行って参ります。

特に重点目表として、①複十字シール募金の強化、②婦人の国際交流の実現をめざし、「結核のない世界」に進んで行きたいと考えております。

会長就任ご挨拶

愛知県地域婦人団体連絡協議会
会長 山田 久子



平成24年度愛知県地域婦人団体連絡協議会会長を務めさせていただくことになりました。

日が経つにつれ、重責が身にしみ、押し潰されそうですが、皆さまのお力をお借りしまして、任務を果たすよう努力していきたいと思っております。

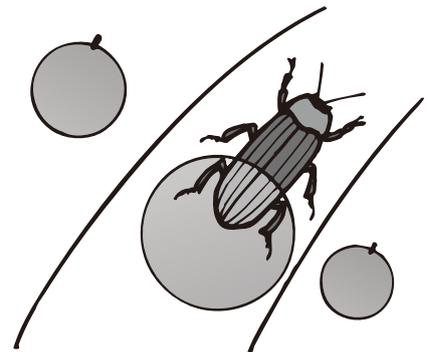
現在、世の中の風潮としまして、昨年の大震災以来、地域の絆を強める事が重要視されているように思

われます。同じ目的の為に地域住民が共に行動する、経験を共有する事により、心の絆、連帯感を強める事が大切だと思います。

結核予防婦人団体に関して今までは余りにも無知だった私ですが、少しずつ経験を積み重ねこの活動

の重要さも再認識しております。

複十字シール募金により、日本のみならず、世界の結核をなくす一端としてお力添えが出来るよう、微力ですが地域の絆、連帯感を大切に活動していきたいと思っております。



わが婦人会活動

県民の健康を願って

青森県地域婦人団体連合会
会長 向井 麗子



結核予防複十字シール運動開始に合わせて、例年通り8月2日、三村県知事を表敬訪問しご協力をお願い致しました。席上知事は、結核が人類の健康を蝕む病になった時代の背景を歴史的に考察し、3月11日の大震災時の劣悪な生活環境で結核患者が増加するのではないかと憂慮するお言葉がありました。後日、結核研究所長 石川先生からその微候は見えないと伺い、安堵しました。

9月23日には、街頭募金運動で複十字シール運動と結核予防週間の啓発に努めました。秋冷えのなか、

小雨まじりの街頭で、健診センターの関係者と婦人会員総勢30名で4カ所実施しましたが、厳しいものでした。でも、県内では独自に地域の行事に併せて実施している婦人会もあるので幹部研修会では、各々の状況を発表してもらいました。

震災地域、豪雪地域と自然災害に怯やかされながらも、県民の健やかな生活を願い、結核のない明るく住みよい社会づくりに貢献したいと微力を尽くしております。



結核のない県を目指して

群馬県地域婦人団体連合会
会長 関 マツ



群馬県は、罹患率11.0で全国でも低い方から2番目となっていますが、平成22年の調べでは、前年より50～60歳代で6名増加し、新結核患者は60歳以上が70%を占めています。

結核予防婦人会は地域婦人団体連合会と表裏一体で活動していま

すが、これからの状況を視野に、結核予防全国大会や幹部研修会に参加し会員の研修を行うと共に地域に合った活動を実施しております。

8月2日、全国で実施される複十字シール運動の開始にあたって、県健康福祉部長を表敬訪問し結核の現状報告と協力方のお願いをしました。県の女性26団体で組織する女

性連協のフェスティバルにはパネル展示や、複十字シールのグッズを配り啓発活動を行っております。

会員全員に「複十字シール運動」の趣旨をPRするため、カットバンを配布し、募金活動を行っております。これからも結核や胸部疾患をなくし健康で幸せな社会を創るため活動を続けて参りたいと思います。



復興に向けて

復興に向けて新たな一步を踏み出している
被災地の皆さまのご健康をお祈り申し上げます。



岩手県地域婦人団体協議会 会長 及川 公子



東日本大震災から1年4カ月が過ぎました。

全国の皆様方から支援金や物資をいただきました。

誠にありがとうございました。

復興元年の今年、どのような一步を踏み出せるのでしょうか。被災者の皆さんはまず生活の糧、仕事をしてお金を得ることが一番だと思えます。仮設住宅は生活音が隣に聞こえ、お年寄りは何もする事がなく、外へも出ないし、小さな子どもを育てている若いお母さんは、泣き声が耳障りにならないように気を遣っているようです。集会場でミニディ



サービスを行ったり、託児所に子どもを預けて、気晴らしができる時間を作ってあげたり、婦人会ならではのお手伝い出来るのではないかと考えています。女性が明るく元気でいられれば、まあるく治まる気がします。

被災者のお気持ちに静かに耳を傾け、実行可能なことから焦らず、半歩ずつでも前に進んでいきたいと思えます。

宮婦連健康を守る母の会 会長 三浦 絢子



東北の沿岸部は、風光明媚な海岸で、水産資源が豊富で人々の生活も安定し豊かでした。

あの3月11日の大震災さえなかったら。

巨大津波が大勢の方々の尊い命を一瞬の中に奪い去り、九死に一生を得た人々は国内外からのご支援をいただきました。しかしながら、今も仮設住宅で不自由な生活をなされています。

1年が過ぎても居住地も定まらず、真っ黒い津波の渦に飲み込まれた人々の姿が脳裡から離れず、夜も眠れないと悩んでおられ、今なお、心の傷は深く癒えてはいないようです。

いまだにがれきの処理も進んでおりません。活気に満ちた沿岸部は、見渡す限りの更地と化してしまいました。

しかし、宮城の各地域に住む人々は、何とかして水産宮城として復旧復興に努めています。その道のりは、遠く長く険しいものと思いますが、地域の人々が心を寄せ合い、強い絆を結び合って一生懸命努力していますので、何卒変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。



日本の四季 ～子供たちの一年～

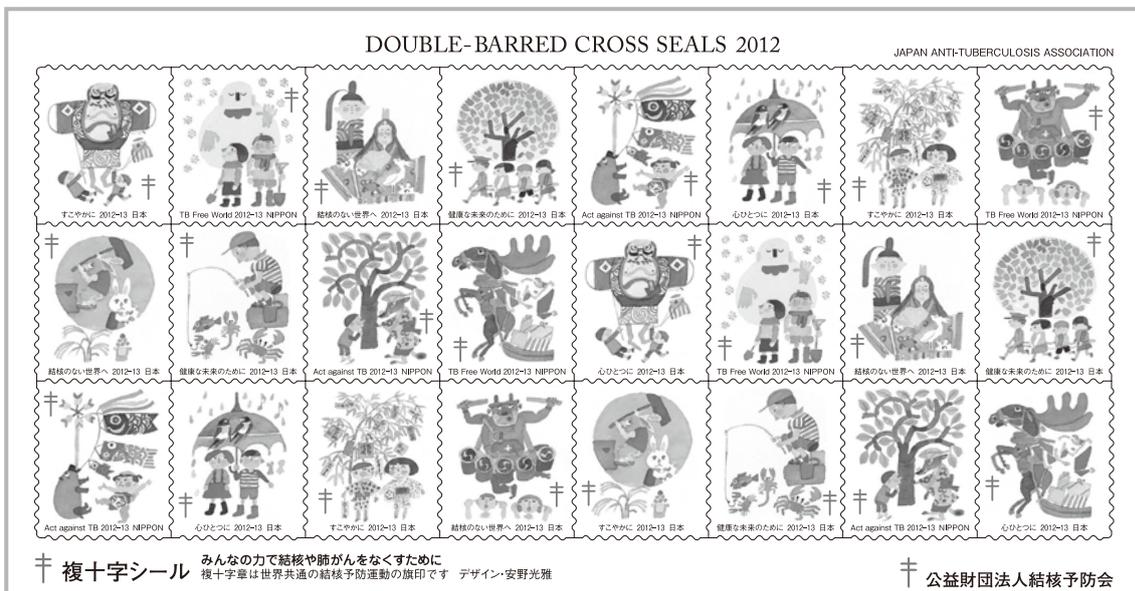
平成24年度複十字シールの紹介

安野光雅（あんの みつまさ）先生のデザインされた、今年の複十字シールは、子供たちの遊びや行事で日本の四季を表現しています。日本は移りゆく季節の年中行事を大切にしてきました。どこか懐かしく感じられる作品だと思いますか。複十字シールは、ハガキに

貼ったり、手紙の封印など、皆さまのアイデア次第で何にでも使えます。複十字シールを広め、是非ご活用ください。

公益財団法人結核予防会 事業部普及広報課

♪2012年 複十字シール♪



イラスト・カット募集

平成24年11月号（健康の輪No.106）に掲載するイラスト・カットを募集致します。

花・動物・その他、何でも結構です。

締切は、平成24年9月7日（当会必着）です。

全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局宛

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-3-12

TEL：03-3292-9288

